

# 非がん性慢性疼痛高齢患者に対する オピオイド適正使用に向けた 地域多職種協働モニタリングシート (日本版PADT)の開発とモデル地域での 有用性に関する実証研究



## 湯本 哲郎 氏

星薬科大学 薬学教育研究センター  
薬剤師職能開発研究部門 准教授

### 〈共同研究者〉

安部 洋一郎	NTT 東日本関東病院ペインクリニック科 部長
清水 研	国立がんセンター中央病院 精神腫瘍科長
加藤 肇	品川薬剤師会 会長
荻野 哲也	品川薬剤師会 副会長
鳥越 一宏	星薬科大学 実務教育研究部門
酒井 寛泰	星薬科大学 疾患病態解析学
里 史郎	星薬科大学 疾患病態解析学

## 要旨

本研究では、品川区をモデル地域とした非がん性慢性疼痛患者に対する包括的事業モデルを構築することを目的に、その基盤事業として①処方実態の把握、②医療従事者を対象としたシンポジウムの開催、③多職種共有患者モニタリングシート(以下、シート)の開発の3点を実施した。処方実態の把握にあたり、品川、荏原薬剤師会を対象にアンケート調査を実施した結果、108施設より回答が得られた。オピオイド使用患者への対応経験のある保険薬局は、78施設であり、対応場所は、店舗窓口で71施設、在宅で7施設であった。対象疾患は、「整形外科疾患や術後に遷延する痛み」で71施設と最も多く、使用経験のある医薬品は、トラマドールの66施設で最も多かった。オピオイド使用による依存症と疑われる患者への対応経験について「ある」と回答した施設は、5施設であった。「しながわ地域課題解決シンポジウム ～多職種協働による痛みゼロを目指して～」を開催し、多職種間で積極的な意見の交換を図ることでシート内容の質的向上が図れた。さらに、シートによる評価精度を高めるための教育用資材を作成し、これらを用いて薬剤師を対象に模擬環境下でトレーニングを実施した結果、モニタリング、情報共有の点で一定の評価が得られた。現在、星薬科大学にて倫理審査を進めている状況であるが、今後は、地域の患者を対象にシートのバリデーションを進めていく予定である。

## 1.背景

近年、非がん性慢性疼痛に対してフェンタニル貼付剤やブプレノルフィン経皮吸収型製剤、トラマドール/アセトアミノフェン配合錠の処方が可能となり、今後、さらなる対象患者の増加が予想される。しかし、本疾患に対してわが国より先行してオピオイドによる治療を実施している米国では、オピオイドの乱用が大きな社会問題となっており、2014年9月に米国神経学会(AAN)は処方オピオイドによる死亡、過量投与、中毒、深刻な副作用のリスクは、頭痛や繊維筋痛症、慢性腰痛などの非がん性の慢性疾患におけるベネフィットを上回ると注意喚起する声明を発表している。このような状況下、非がん性慢性疼痛に悩む患者への適切な疼痛管理とオピオイドの乱用防止という切実な両問題に対して適切なアプローチが早急に求められているが、非がん性慢性疼痛に対してオピオイドを用いた治療に精通した医療従事者が少ない点、患者や家族等に対するインフォームドコンセント(オピオイド

使用に対する啓発を含む)が十分に実施されていない点、在宅環境における患者モニタリング体制が十分確保されていない点等を背景に抜本的な対策が取られていないのが現状である。

本研究では、「非がん性慢性疼痛に悩む患者への適切な疼痛管理とオピオイドの乱用防止」を目標に、品川区をモデル地域として本疾患へのオピオイドを用いた治療に精通した医療従事者を育成するとともに、在宅領域において多職種協働でモニタリングするためのツールの開発と検証を行った。

## 2.活動の概要

### (1)地域多職種連携シンポジウムの開催

医療従事者を対象に、非がん性慢性疼痛に対する知識ならびに技能の向上を目的とした多職種協働シンポジウム「しながわ地域課題解決シンポジウム～多職種協働による痛みゼロを目指して～」を平成28

年1月31日(日曜日)に星薬科大学で開催した(図1)。教育講演としては、「非がん性慢性疼痛の治療戦略と医療チームの在り方」、「痛みを有する患者の心理的背景と精神的苦痛、依存に対するマネジメントの在り方」に関する2演題、また、シンポジウムとしては、テーマを「次世代の多職種連携、専門職からみた地域疼痛管理の現状と展望」とし、医師、薬剤師、看護師等の多職種で積極的な意見の交換と共有を図った(図2)。

**しながわ地域課題解決シンポジウム  
～多職種協働による痛みゼロを目指して～**

日時 平成28年1月31日(日) 13:00-17:00  
場所 星薬科大学 本館 第1ホール (2F) 戸越線駅より徒歩5分

【Opening Remarks】13:00-13:10  
浦本晋郎 先生 (星薬科大学 薬剤師職能開発研究部門)

【教育講演】13:10-14:50  
座長 瀧井素彦 先生 (星薬科大学 疼痛病態解析学)  
講演1 13:10-14:00  
清倉 安部洋一郎 先生 (NII東日本関東病院 ペインクリニック 科長)  
「慢性疼痛の治療戦略と医療チームに望むこと(案)」  
講演2 14:00-14:50  
清倉 清水研 先生 (国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科)  
「がん患者のこころのケア～痛みを抱えた患者への対応～」

【シンポジウム】15:00-16:30  
座長 瀧本晋郎 先生、加藤賢 先生 (品川薬剤師会 会長)  
「次世代の多職種連携、専門職からみた地域疼痛管理の現状と展望」  
演者1 齋藤桂吾 先生 (フロンティアファーマシー)  
「薬剤師の立場から」  
演者2 鳥嶋幸子 先生 (品川医師会立訪問看護ステーション 管理者)  
「看護師の立場から」  
演者3 田上憲夫 先生 (国立がん研究センター東病院 緩和医療科)  
「医師の立場から」  
演者4 鳥越一宏 先生 (星薬科大学 薬学教育研究部門)  
「地域疼痛管理における多職種協働モニタリングシート(日本版PADT)の開発」

【総合計画】16:30-16:50  
鳥嶋幸子 先生 (品川医師会立訪問看護ステーション 管理者)

【Closing Remarks】16:50-17:00  
鳥嶋幸子 先生 (品川医師会立訪問看護ステーション 管理者)

【参加費】無料 認定共催：品川薬剤師会・荏原薬師会・星薬科大学  
※本会場には星薬科大学認定学生証(2年生以上)・研修センターへの申請に使用料を払ってご利用いただけます。  
本シンポジウムは、第4回 杉原地域医療振興助成の支援を受けて実施されます。

図1 多職種協働シンポジウムのプログラム



図2 シンポジウムの風景

(2) 地域を対象とした非がん性疼痛の処方実態に関する調査の実施

地域における非がん性慢性疼痛の処方実態を把握することを目的として、品川、荏原薬剤師会の協力のもとでアンケート調査を実施した(n=108)。非がん性慢性疼痛によるオピオイド使用患者への対応経験のある保険薬局は、78施設であり、対応場所(複数回答)は、店舗窓口で71施設、在宅で7施設であった。対象疾患(複数回答)は、「整形外科疾患や術後に遷延する痛み」で71施設と最も多く、以下、「帯状疱疹に関連

する神経障害性疼痛」で19施設、「線維筋痛症、神経難病」で10施設、「糖尿病に関連する神経障害性疼痛」で4施設であった。また、使用経験のある医薬品(複数回答)は、トラマドールの66施設で最も多く、以下、ブプレノルフィンで28施設、フェンタニルで15施設、コデインで8施設、モルヒネで3施設であった。オピオイド使用による依存症と疑われる患者への対応経験について「ある」と回答した施設は、5施設、「わからない」と回答した施設は、11施設であった。

(3) 多職種協働モニタリングツールと教育資料の開発

非がん性慢性疼痛に対してオピオイド系鎮痛薬(フェンタニル、トラマドール、ブプレノルフィン等)を使用している患者を対象に地域、特に在宅領域における治療の適正化向上を目的とした多職種協働モニタリングツールを開発した(図3)。また、開発したツールへの理解向上と適正使用を目的に教育資料を開発し、薬剤師を対象として模擬環境下で有用性を検証し、一定の知見を得ることができた。

図3 多職種協働モニタリングツール

3. 今後の課題

品川区をモデル地域として、人的環境を整備するとともに多職種協働モニタリングツールならびに教育資料を開発した。今後は、実臨床にて本シートのバリデーションを実施していきたい。